

はだしのイエスさま

先週、「ぶどうの木」2007年1、2月号に掲載されている「風の教会への歩み」の年表に、もう一度目を通してみました。主が私たちのために道を開き、風の教会を導いておられることの感動があらためて迫ります。「風の教会への歩み」を見ながら、主がくださったひとつひとつのことの背後に、「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」（黙示録 3:8）という主の声を聞くような思いでした。

その年表のなかに、私たちの教会用の土地についての流れが書かれています。

2000年、私たちは風の教会用の土地、南芦屋浜のことを県に聞きに行きますが、その時は「まず宗教法人を取ってから、話しに来て下さい」と断られたので、私たちは文化庁に宗教法人の申請を始めました。

2003年8月9日、西宮の東の空に二重の虹がかかり、その日の「平和の祈りとさんび」の時に、「もはやお前たちの前にたちはだかるものは、何一つないであろう」ということばが美津子さんを通して私たちに与えられました。その1週間後になんと宗教法人が認可されたという連絡が入り、宗教法人が取れたので、早速、県に土地購入の申請に行きました。ところが「南芦屋浜の土地は商業用地にするため宗教団体には売ることができない」と言われ、私たちはたいへんなショックを受け、この日、ピーター先生、美津子さんが本部にいるスタッフを集めて祈り、また全リーダー、スタッフに本部から緊急の祈りのリクエストを送り、共に祈ってもらいました。

その年の10月4日のことです。「平和の祈りとさんび」の最終日、南芦屋浜の土地取得の門が何とか私たちに開かれるよう祈っている中で、美津子さんがひとつの幻を見ます。それは、ボロボロの衣をまとい、はだしのドロドロの足で芦屋浜を歩いておられるイエスさまの姿でした。私たちは美津子さんが見たこのイエスさまの幻に大きなインパクトを受けました。この幻が何を意味するのかはわかりませんでしたが、主が私たちの祈りに答えてくださったことを確信しました。そして、その幻を見た翌月の11月28日、思いがけず、風の教会の土地の件について助けてくださる方が現れ、県との間に立って交渉して下さり、一度は「宗教団体には売ることができない」と言われた南芦屋浜の土地取得のための門が、私たちに開かれたのです。

今までの「風の教会の歩み」を振り返っても、ボロボロの衣をまとい、南芦屋浜の土地をはだして歩いておられるイエスさまの姿の幻は、最も印象に残っていることのひとつです。土地取得のための門が開かれるよう、全国、全世界で心を合わせて祈った時、主が美津子さんに見せてくださった幻。何かきつと特別な意味があるに違いないと思っていましたが、この幻を見せられてから間もなくして大きな山が動いたのです。

私は「風の教会への歩み」を見た次の日、旧約聖書にあるルツ記を読んでいました。その時ルツ記のなかにあるひとつのみことばに、目が釘付けになりました。その瞬間、南芦屋浜をはだして歩いておられたイエスさまの姿の幻のことが、私のなかであふれるようにわきあがってきたのです。それが次のみことばです。

むかしイスラエルでは、物をあがなうこと、権利の譲渡について、万事を決定する時のならわしはこうであった。すなわち、その人は、自分のくつを脱いで、相手の人に渡した。これがイスラエルでの証明の方法であった。（ルツ 4:7）

これは古代イスラエルの、あがなう事と権利の譲渡についての決定の証明の方法です。聖書のすべてのことばは、いにしえから永遠に至るまで、十字架のキリストを指し示

しているということを思う時、このルツ記のことばに、私は南芦屋浜をはだして歩いておられたイエスさまの姿を見るのです。

八方ふさがりに思えた土地購入への道を、私たちは心をひとつにして祈っていました。あの時点では、果たして土地のことがどうなるのか、まだわかりませんでした。主はすでにあの日、私たちにひとつの幻をもって「お前たちの前にたちはだかるものはない」ということを語ってくださっていたのです。ボロボロの衣をまとい、南芦屋浜の土地をくつを脱いで、はだして歩くイエスさまの姿の幻は、私たちの祈りとさんびによって、すでに霊の世界においては南芦屋浜の土地が風の教会の土地としてあがなわれたこと、そして県から私たちに土地の権利が譲渡されたことの証明であったのだと思いました。「ここはお前たちのための土地である」と、神の揺るぎない決定を証明するために、イエスさまがくつを脱ぎ、はだして歩かれていたのです。あの幻はただの幻ではなかった。イエスさま自らが、風の教会のための土地のあがないと権利の譲渡を、証明してくださっていたのだと思うと、私は本当に胸がいっぱいになりました。

風の教会とは、キリストのからだです。見えないキリストのからだがかたちを取ってこの地に現れるというのは、一番深い意味で、神がキリストのからだを天から地に譲渡してくださったことを意味するのだと思います。神が、この地球の最後の救いのために、風の教会をこの地に与えてくださったのです。

そして今年2007年4月のことです。その月の「平和の祈りとさんび」で、ピーター先生は祈りのなかで不思議なことばを語られました。

わたしははだしである お前たちもはだしになるがよい

ピーター先生の祈りが終わり、美津子さんが私たち働き人に向かって言われました。「ピーター先生が言われた『おまえたちもはだしになりなさい』とは、どういうことか、また一人一人考えてみたらよいと思います」

今回ルツ記4章7節のことばを読んだ時、私はピーター先生が言われたことばの意味もわかったように思いました。イエスさまは神の子の権利を、私たちの手に無条件で譲渡してくださった。そのためにご自分は罪人として十字架にかかられましたが、それによって本来神から最も遠く離れていたような私たちに、神の子たる身分が授けられ、私たちは神に愛される者とされたのです。イエスさまが私たちに向かって「わたしははだしである」と言われる時、それは十字架のあがないの比喩であると思います。

そしてそのイエスさまが、今度は「お前たちもはだしになるがよい」と言われた。私たちがはだしになるというのは、私たちの抱えているありとあらゆる重荷、悲しみ、痛み、それらのすべてが十字架に明け渡されたことを、私たちが証明することであると思います。私を苦しめてきた重荷の所有権は、もはやキリストの十字架に完全に譲渡された。それは私たちに注がれた十字架のいやしの証明です。十字架のもとに行ったものは、すべてがさんびとされる。さんびは、あがないの証明。私たちにってはだしの姿とは、あがないの証明である天のさんびをささげる姿なのです。

イエスさまがくつを脱ぎ、はだして歩かれた南芦屋浜の地に、風の教会が建てられようとしている。主がはだしになられた場所で、私たちもはだしになる。私たちが、この地に注がれるあがないの愛を、さんびによって証明する時が来たのです。